1年生の英語力と中学校における内申点の相関

松田　奏保*

On the correlation between the score of English tests and the grade in junior high school

Kanaho MATSUDA

Abstract

I examined the correlation between each score of a school test and two objective tests, and the correlation between each score of these tests and the grade in junior high school, in order to show English abilities of students in the beginning of the first year. As a result, it turned out that those factors have correlation with each other. I could have a helpful guide to making English classes from the result of this study.

1　目　的

学生の成績評価をする際、主に年に4回行われる定期試験の結果を基に評価しているが、その際に常に考えるのが、「学校の定期試験で高い点数をとる学生は英語力が高いといえるのか」「そういう学生は定期試験以外の試験でも高い点数をとることができるのか」という疑問である。そこで定期試験とは別の客観テスト等を行い、その結果と定期試験の結果を比較することで、両者の相関を調べることにした。また、中学校で受けた評価である内申も中学校での定期試験の結果が主な基準になっていると思われ、そうした内申評価が高専に入ってからの英語力とどのような相関があるのかも調べてみることにした。今回の調査では、高専に入ってきた1年生の初期の段階に対象をしぼり、学生の英語力がスタートの時点ではどういう状況なのかを明らかにしたい。

2　方　法

英語力とは言語（英語）を操る能力であることから、その力を測る際には当然いろいろな要素が関わってくることになる。しかし今回の調査では、学校の定期試験との比較という観点から、あえてペーパーテストにおける結果を使って分析することにした。その分析対象は、1つの定期試験と2つの客観テストとし、両者とも主にリーディング力とライティング力を扱った試験である。ここでは、この客観テストの結果を英語力とみなすことで分析を行う。以下に基準とした3つのテストの形態を述べる。

(1)　前期中間試験：授業では検定教科書を用いており、試験では授業の中で扱った英文を使って読解力や文法力を問う。既習の英文であり、また試験範囲もあるので、習ったことをしっかり理解して覚えていれば点数が取れる試験と言える。

(2)　実力テスト：中間試験と対比される客観テストとして行い、ここでは実用英検3級の試験を用いた。単語、熟語、作文、読解力などを問う問題がマークシート形式で出される。一般に公的に行われる試験であることからも、くせのない基本的な試験問題と言える。

(3)　入学選抜試験：高専には推薦で入学する学生もいるので、全員がこの入学選抜試験を受けているわけではいない。しかし高専に入る段階の英語力を問うのがこの試験なので、今回の調査に必要な要因として用いた。入学選抜試験も(2)の実力テストと同様、中間試験と対比される客観テストとして扱う。記号問題だけではなく、

*　助教授　一般教科

単語や英文を書いて答える問題も含まれている。

分析は、まず中間試験を基に他の２つの試験結果を比較し、学校の定期試験で測る英語力と客観テストで測る英語力の相関関係をみる。その後さらに、各試験の結果を中学の内申点と比較し、高専に入った時の英語力とどのような相関があるかを調べる。

3　結果と考察

3.1　中間試験と実力テストおよび入試の相関

前述した各試験の形態から考えて、「実力テストで低い点数でも、既習事項を確認する中間試験では高い点数が取れる」、または「実力テストで高得点でも、中間試験で勉強をしなかったために低い点数しかとれない」というケースが予測される。そのため、中間試験と実力テストおよび入試の相関は弱くなるのではないかという予想をたてた上で分析を行ってみた。

図１は中間試験と実力テスト、図２は中間試験と入試の相関をグラフ化したもので、各テスト同士の相関係数は表１にあるとおりである。結果、実力テスト、入試ともに中間試験と相関関係があることが示された。

ただ、実力テストと入試という客観テスト同士の相関関係（図３）に比べ、図１、図２とも相関の幅が広がっているのがわかる。表１の係数をみても、中間試験と実力・入試の相関は、客観テスト同士の相関よりも数値がやや低くなっている。これは、中間試験の平均点が高く、客観テストでみる英語力が低い学生でもある程度高い点数がとれたことが原因の１つと考えられる。実際、実力テストおよび入試で50点以下であっても、中間試

Tab.1　４つの要因の相関係数

	実力	中間	入試	内申点
実力		0.553 **	0.639 **	0.278
中間	0.553 **		0.416 *	0.433 *
入試	0.639 **	0.416 *		0.280
内申点	0.278	0.433 *	0.280	

**p＜0.001　*p＜0.05

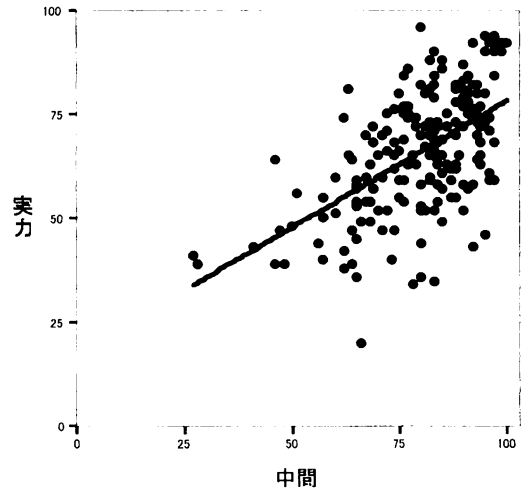

Fig.1　中間試験と実力テストとの相関関係

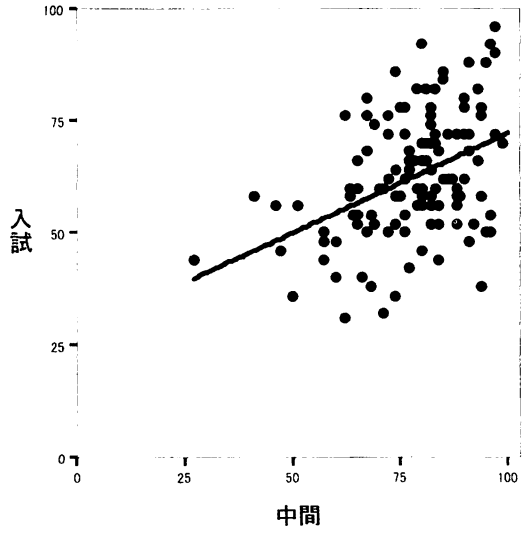

Fig.2　中間試験と入試テストとの相関関係

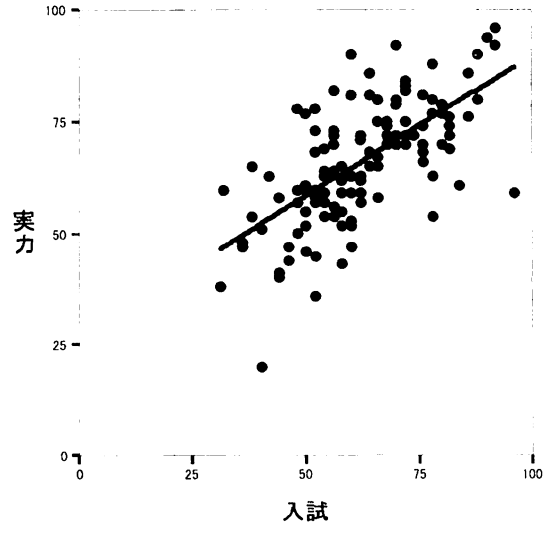

Fig.3　入試テストと実力テストとの相関関係

験では50点以上を取っている学生がかなりおり、そのことによって相関の幅が広がったと考えられる。

以上の結果から、高専に入ってきた初期の段階での学生の英語力に関して次のようなことが言える。第1に、学校で行う試験と客観テストとの間には相関があり、中間試験の結果が学生の英語力を反映しているということ。第2に、全体的に中間試験の結果がよく、既習事項をしっかり理解し覚えるという姿勢がみられる、ということである。実力テストや入試の点数が高いのに（英語力が高いのに）、中間試験では点数が低いという現象が見られないことも、以上の2点を裏付けるものと言える。

3.2 中学校の内申点と各テストの相関

ここでの内申点とは、中学校3年間の英語評価を平均して出したものをいい、その内申点と3つの各テストとの相関関係を調べた。それをグラフ化したものが図4、5、6である。また相関係数は前出の表1にあるとおりで、結果、内申点と中間テストとの間には相関関係が認められたが、入試、実力テストとは相関がなかった。このことから、中学校の総合的評価である内申点は、必ずしも学生の英語力を示すものではないと言える。

ただ、内申点と中間試験に相関があることは興味深く、中学校での評価が高専での定期試験の結果に反映されていることがわかる。

またさらに、内申点を上・中・下にグループ化し（表2）、各テストにおける平均値の群間差を分析してみた（表3）。結果、中間試験においては上位グループと中・下位グループ、および中位グループと下位グループの間に高い有意差が認められた。このことからも内申点と中間試験の相関が明らかにわかる。前述のとおり、内申点は中学校での定期試験を基準にしていると考えられ、「学校の定期試験」という共通項でくくられる内申点と中間試験が、他より高い相関関係になったと推測される。

また表3において、実力テストでは上位グループと中位・下位グループとの間に高い有意差が認められたものの、中位グループと下位グループ間には差がみられず、中・下位層における不確実性がうかがえる。さらに入試に関しては、中位グループと下位グループ間だけではなく、上位グループと中位グループ間にも差が認められず、各グループにおける相関の不確実性がより高くなる傾向が

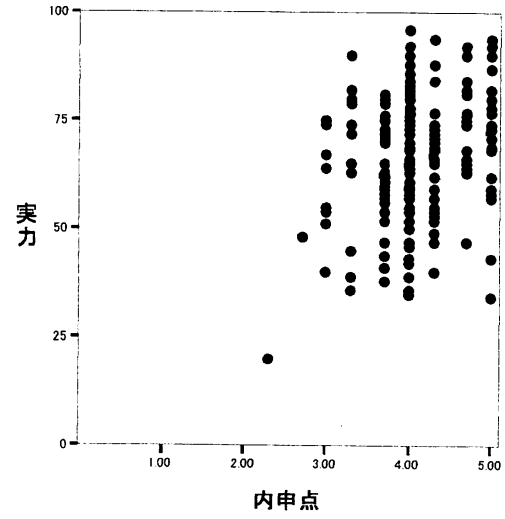

Fig.4 内申点と実力テストとの相関関係

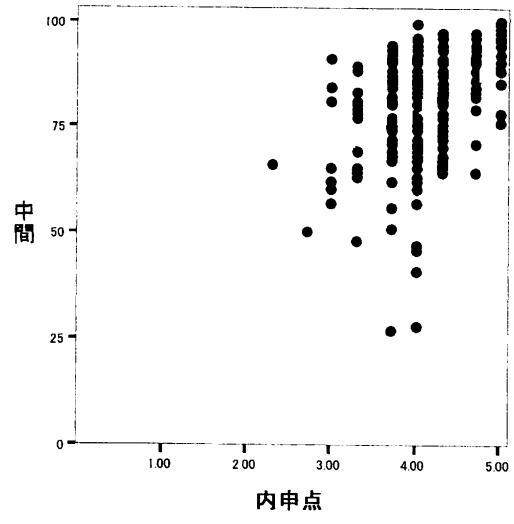

Fig.5 内申点と中間テストの相関関係

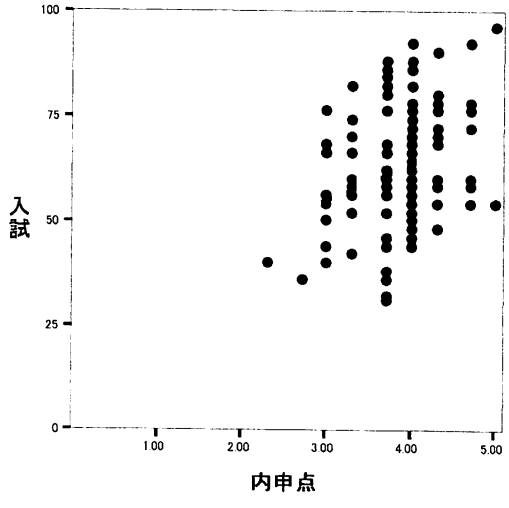

Fig.6 内申点と入試テストの相関関係

Tab.2　内申点別グループ化

	度数	パーセント	度数	Group
5.0	22	10.95	42	High
4.7	20	9.95		
4.3	35	17.41	104	Middle
4.0	69	34.33		
3.7	30	14.93	55	Low
3.3	15	7.46		
3.0	8	3.98		
2.7	1	0.50		
2.3	1	0.50		
合計	201	100		

注）内申点については、中学校3年間の英語の5段階成績を平均した

見られた。このことから入試の内容・形態が、中学校での学習や試験内容・形態に比べてやや特異なものであると考えられる。

図4，5，6を見ても、内申点が3.7 ～ 4.3である最も人数の多い層で、各テストでの点数の幅が25 ～ 100点と大きくなっているのがわかる。全体的に見て、内申点と各テストの間には、こうした不確実で流動的な面が含まれていることも示された。

4　まとめ

今回の調査により、高専に入った初期の段階での学生の英語力は定期試験の結果に反映されているということと、中学校による総合評価である内申点は定期試験とのみ相関があり、客観的に計る英語力とは必ずしも呼応しているものではないことがわかった。

ただ、学年が上がってもこの結果どおりになるかどうかはわからない。これまで高専で教えてきた中での経験から、「中学校の時には英語ができたのに高専に入ってからできなくなった、もしくは勉強しなくなった」とか「中学校の時の評価は悪かったけど高専での定期試験の成績がよくなった」または「定期試験の点数は取れるけど客観テストになると取れない」という学生が増えてくるものと思われる。そうすると初期の段階で高かった相関関係も次第に弱まることになる。もちろんそれは同じような調査を改めてしなければわからないが、以上にあげた図や表に見られる相関のばらつきを考えても、そう予想させるものがある。

今後学生に英語を教えていくにあたり、今回の調査結果から次の2点を重視したい。まず、学生が持っている定期試験に取り組む姿勢を失わせないこと。そしてその定期試験の結果と、英検やTOEICなど公に行われている客観テストの結果の相関を保てるようにすること。学校の試験はできるのに実力がない、または、実力があるのに学校の試験はできない（やらない）といったことが起これば、授業の内容や方法が問われることになる。英検やTOEIC などの客観テストは英語力を測る1つの基準に過ぎないとは言え、学生がそうした公に認められる英語力を高められるように授業を行う必要があるだろう。1年生の初期の段階における英語力の様態が明らかになったことで、今後の授業を考える指針となった。

謝　辞

今回この調査をするにあたって、データの処理および表・グラフ作成に、本校一般教科、関教官に協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

参考文献

1）高梨庸雄・高橋正夫「英語教育学概論」金星堂　1990
2）ビビアン・クック「第2言語の学習と教授」米山朝二訳　研究社出版　1993

（平成13年11月29日受理）

Tab.3　内申点別の3テストの平均値と分散分析結果

	H	M	L	F-value	LSD
実　力	73.38	65.19	61.71	8.56	H>M.L　**
中　間	89.81	78.41	74.38	20.28	H>M.L　M>L　**
入　試	70.0	63.73	59.02	3.44	H>L　*

注1）H（内申点上位群）、M（内申点中位群）、L（内申点下位群）
注2）**p<0.001　*p<0.05